

## 第2回 小中一貫教育校検証部会 会議要録

開催日時	平成26年1月14日(火) 午前9時30分～11時30分	
会場	練馬区役所本庁舎12階 教育委員会室	
出席者	委員	酒井 朗、木下川 肇、田頭 裕、池田和彦、大石光宏、堀田直樹、羽生慶一郎、
	協力委員	伊藤直樹
	事務局	教育指導課統括指導主事、教育企画課新しい学校づくり担当係
傍聴者	なし	
案件	1 第1回小中一貫教育校検証部会要点録について 2 検証項目および検証資料について	

### 1 開会

#### 部会長

いよいよ、本格的な議論になってまいります。小中一貫教育、学区制改革がいろいろ議論されておりますので、ぜひこの検証でしっかりした実績を上げていきたいと思っております。何とぞよろしく申し上げます。

### 2 案件

#### (1) 第1回小中一貫教育校検証部会要点録について

#### 事務局

第1回小中一貫教育校検証部会会議要録の確認をお願いします。修正等ございましたら、事務局までお願いします。

#### 部会長

なお、お気付きの点がありましたら、後ほどでも結構ですので事務局までお願いします。

#### (2) 検証項目および検証資料について

#### 部会長

検証項目および検証資料についてということで、資料が提出されていますので事務局からお願いします。

#### 事務局

(資料1から5説明)

#### 部会長

資料1が、前回、要望があった4・3・2の区分の根拠、理由付けの資料、資料2は、基本方針の中の小中一貫教育校設置の意義と効果の5項目に即して考えていくべきというご意見を踏まえて、事務局に検証項目を並べ直していただいたものです。この資料の各欄ごとに期待された効果が検証できるか、また活用する資料は何かご検討をお願いします。

その他は、当初作った項目にあてはまらないものになっています。多様な内容が入っているので、整理していくかご議論いただきたいと思います。

資料2の各項目について少し説明してください。

#### 事務局

(資料2説明)

#### 部会長

③から⑤は、後ほど検討いただくことにして、まず、①と②について事務局の説明に対する質問や今後の検討にあたって、活用できる資料、検討の観点について、ご意見をお願いします。

#### 委員

前回の会議で資料1の作成をお願いしたのは、4・3・2の3期に分ける考え方が、小中一貫教育の根底にかかわるので練馬区の基本的な考えを明確にしてほしいという主旨です。基本方針の9ページの構造図に、4・3・2の区分けと指導の重点、発達の特徴等が記載されています。この中で、指導の重点としてI期の4年まで基礎、基本を繰り返して基本を学ぶとされています。4年の学習指導の目標、目的と考えた場合、4年生までが本当に基本を学ぶことにふさわしいかどうかの検証も必要と思います。

①の検証項目として1から6まであります。1と2は大きな検証内容で、3以降は、1と2を検証するためのハウ・ツールの検証だと思いますので、区分けして考えたほうが良いと思います。

#### 部会長

ご指摘のとおり、①の検証項目1、2は網羅的に、学習指導と生活指導全てを含んでいますので、検証の場合には細分化、項目立てが必要になると思います。その際に3期でそれぞれ何をするのかという押さえが必要になるというご指摘をいただきました。

すると、練馬区の基本的なコンセプト、考え方を押さえておかないと、9年間を見通した教育課程の話に入れられないということになります。資料1で広島県呉市と品川区の考え方が提出されていますが、練馬区の3期の区分けの考え方、指導方針について、まず確認してから議論を進めたほうが良いですか。

#### 事務局

基本方針7ページに、9年間で3期に分けて、重点を明確にして指導とあります。9年間の分け方に関するさまざまな議論や実践事例を参考にしながら選んだ背景として、特に第4学年の児童の発達の変化、5、6、7年生という部分では小学校、中学校の接続部分のいわゆる中

1 ギャップへの対応という2つのテーマを中心に、4・3・2の3期に分けるという方式を練馬区が選んだと理解しております。それが7ページと9ページに、考え方として整理されています。

#### 部会長

①番の学習面については、基本方針の指導重点項目を念頭に検証を考える作業になりますか。

#### 事務局

4年生まで基礎・基本を繰り返して基本を学ぶだけでよいのか、学習内容や状況によって変わる部分があると思います。実際の教育内容と構造図で示している考え方が必ずしもイコールとは言えない部分があると思いますので、その検証の仕方をご議論いただきたいと思っております。同様に、5、6、7年生の「基礎・基本を生かして意欲的に学ぶ」、8、9年生の「基礎、基本を主体的に学ぶ」という表現のところとも関連すると思います。

#### 部会長

この柱立てに即して、実際に学校で行っている教育活動を踏まえて、どのように検証を考えていけばいいのか、お考えをいただければと思います。

#### 委員

練馬区が基本方針で示した学校の方向性に基づいて、創意工夫をしてきたということです。幾つかの自治体に見られるような特設した教科を作らずに、基本的に学習指導要領に準拠していくことになっているので、基本的にはあまり大きな影響はできません。

練馬区は、比較的児童生徒の転出入が多いので、あまり特殊なカリキュラムでは対応が困難だと思います。学習指導要領に基づいていることを検証したほうが良いと思います。

3期の区分をどのように活かしていくかという創意工夫は必要です。学力の底上げや、学習する意欲をどう育てていくか、そのための条件付けを充実させることが小中一貫教育校の特色だと思います。

そういう視点で、例えば伝統文化理解教育と関連させて、1年生からことわざや百人一首への取り組みで言語活動を充実させるとか、ふれあい給食、交流給食を通して、上級生との関わりを持たせることによって1年生や2年生も望ましい帰属感を育てたり、上級生を見習って学校生活を意欲的に取り組ませたりすることが、4・3・2の区分を具体的に反映させる活動と、3年間、努力してきました。

#### 部会長

学習指導要領準拠ですので、学年に応じた学習指導要領の内容の達成度合いという押さえが必要で、学習意欲の向上に向けたさまざまな取り組みの結果として、学習意欲がそれぞれの学年に、どのぐらい向上していくのかということを見学年ごとに見ていくと考えればよろしいですか。

#### 委員

そうです。中1ギャップにどう対応するかということで、例えば一部教科担任制を導入した

り、5、6年生から、中学生と同じ校舎の中で、同じ時程にしたり、児童生徒会なども同じ活動をさせたり、5年生から部活動に参加させたりすることで、ギャップに対応して力を育てるようにするなど4・3・2の考え方をどのように具現化していくかの視点で実践してきました。

#### 部会長

多くの自治体が理由付けはしていますが、練馬区では、子供たちの様子から、4年生で感覚的に区切りがあるということ、中1ギャップと言われる不適應問題、小1プロブレムという課題への対応として4・3・2という区分でやってみようという話だったと思います。

ここの検討課題としては、先生方が感じられているように4年生と5年生で発達の段階に区切りがあるとして、学習指導面で4年生までと5年生からの指導を少し変えることの効果や、中1ギャップ問題に対応して、5年生から中学1年生までをひとつの区切りとして指導することでの効果、また小学校1年に上がるときも大事かもしれないといった点が検証できればと思います。

4年生までは通常の小学校課程で指導していく中で基礎基本が、定着しているのかどうか。それから、中核は真ん中の3年間ですので、教科担任制を入れ、50分授業をし、校舎も中学校の校舎に移して学習させることによって、学力、学習意欲、広い意味で学習の取組などに何らかの変化が見られるかどうかといったこと。

もう1つ、②の生活指導面での適応がうまく図れるかどうかを中心になるのではないかと思います。

#### 委員

そのとおりだと私も考えています。この検証項目が4・3・2の区分における発達段階に応じた計画的・継続的学習指導の充実ですから、Ⅰ期では、どういうことができたのか。Ⅱ期はどうかというところを押さえていかななくてはならないと思います。ベースは基本方針9ページだと思います。

#### 部会長

区切りとして、まず小学校の4年生までの基礎・基本を押さえる、学習面でしっかりと検証するために使えるデータ、資料をどう想定すればいいと思われませんか。

#### 委員

5年生の学力調査の結果がその1つになると思います。

#### 委員

本校では掛け算の九九ができないと、中学校の数学の授業が全くわからなくなるからその子供の将来的な自己実現は、かなり厳しいという認識です。小中一貫教育校であるから、同一の職員室で、そういう危機感を子供の成長と同時進行で共有できます。

算数では、例えば数の概念が十分でなかったり、論理的に考える力が身につけていないと、学習が滞ってしまいます。つまり、算数、数学は、一番つまづきやすい要素があり、つまづくことが本人にも指導者にも顕著にわかりやすいと思います。

算数、数学に限らず全ての教科、領域も含めて、勉強のベーシックな部分のつまづきやすい部分を明らかにしてその部分についてはもう少し学習の計画にボリュームを持たせて、丁寧に、繰り返して教えるという指導計画を9年間を見据えて作っていくことが必要と考えて、今年から学習指導要領準拠で、単元の配置、単元計画の検証、軽重を考えて指導計画を作るという研究に取り組んでいます。

#### 部会長

お話を聞いて最初の4年間の検証は、校内研究と連動させていくことができると思いました。

#### 委員

まだ研究半ばですけれども、そういう視点で取り組んでいる小中一貫教育校の校内研究も評価の対象にしてほしいし、場合によっては支援してほしいと思います。評価は、今あることだけでなく、支援の在り方も評価に入れてほしいと思っています。

#### 委員

学校の経営方針との関わりがでてくるので、例えば、今後5・2・2ということも想定しているのか、それとも4・3・2でいくのかという点についてはどうですか。

#### 部会長

検討の仕方に影響があるので、区の方針をお伺いします。

#### 委員

義務教育を小中一貫教育の中で、どういう年齢区分にするかについては、さまざまな分け方がありそうだというのが、国の部会の中でも議論されている話で、これという決め手はない状況にあるのはご案内のとおりです。

大きな流れとしては、4・3・2と4・5があると思いますけれども、5・2・2という流れも最近は出てきているような状況もありますので、なかなか難しいところです。区分けについて国の方針が出るようなこともなくて、それぞれの自治体の教育委員会の考え方に基づいてその点は判断してくださいという、多様性を認めるやり方になってくると思います。

そういった中で、練馬区の教育委員会はどうするかという話ですけれども、小中一貫推進方策以降の検討がありませんので、現段階では、4・3・2という区分をもとに進めて、4・3・2の区分が学校現場での教育活動に支障があるようになってくるのであれば、見直しの対象になると思います。

特に施設が離れた学校間において4・3・2の区分で本当にできるのかという議論はあるような気がします。特にⅡ期が2つの学校にまたがっていて施設が離れている学校間で、2つのものを1つのまとまりとして本当に継続できるのかという根本的な部分も残されているとおもいます。それは別途、推進会議で議論をしていただく内容とおもっています。大泉桜学園において、校舎の配置上の問題もありますけれども、低学年4という区分の中で一定の成果を上げてきているという現実もありますので、当面は4・3・2で進めていけるのではないかとおもっているところです。

#### 部会長

4・3・2は当面の方針として考えていくことで確認いたしました。

#### 委員

先ほどの話を伺っていて、小中一貫教育校だからこそ、小学校の先生方の1年から4年までの基礎、基本という意識が高まっている部分はあると思います。それは必ず子供にいい指導の効果を生むと思いますので、活用資料の5番の教員からのヒアリング、意識調査のところで、大事な視点だと思いました。

私が4・3・2にこだわったのは、区分けにおける指導の重点がでてくるので、その点を検証することが一番大事という意味です。

#### 部会長

最初の4で、結果として出てくる学力は、5年生の学力テストの結果も参考にはしますけれども、学習指導の取組の評価に基づいて子供のつまずきの箇所を検討し、必要な手だてを講じ、その結果、学習活動がどのように変化したかという報告が、検証の1つのアウトプットになるという考え方でよろしいですか。

検証というと、アンケート結果を外部から評価するような感覚がありますけれども、課題に対して各学校が取り組んだプロセス、取組を示すことが1つの検証の在り方だと思います。

国に報告するときに、そのようなやり方のほうが良いと思っています。

#### 委員

私見ですが、中1ギャップの解決に向けて、小学校でも教科担任制を導入するとか、グェスティーチャーのような形で、中学校の教員が小学校に行ってプレ授業をしています。小学校は学級担任が基本的に全科を教えます。中学校になると完全に教科担任制になります。学習面でのギャップもありますが、私は教える教師との人間関係が大きいと思っています。

小学校で、クラスの子供たちの関係性を非常に良く高めながら、一枚岩の学級経営をしていくと課題が生じやすい子も、うまく学校生活がおさまると私は思っています。ところが、中学へ行くと教科担任になって、子供から全教科の教師との関係性を作っていかなければならないので、なかなか難しくなります。つまり小学校で優れた担任が指導・育成をしていると、子供の問題が顕在化しないし、担任の方でも課題として認識されないことがあります。

その結果、中学校側から見ると、入学時の引き継ぎなどをしたときに、指導上の課題を連絡してくれないので、入学後に非常に困ったという話はよく聞きます。そこにも小中が連携しづらい、実は見えない壁があると思います。

つまり、子供の発達などを考えたら学級担任が全科を教えるほうが有効であると思いますが、子供との関係性を上手く見取っていかないと連携した指導は難しいと思います。空気を少し循環させるという点で、5、6年生から教科担任制や、小中がいろいろな形で交流していく要素を持たせていくことで、特に思春期の子供たちを、たくさんの関わり合いの中で育てていくという要素が必要だと思います。私は4・3・2の区分が学校の中にあることで活性化すると考えています。

#### 委員

中学生が4年生や1年生に関わることは、資料2③の概念に入ると思いました。特別活動が重要な要素ではないかと思えます。他の学校でも何となくつまづく場所を予測して、九九の徹底的な指導などは取り組んでいますけれども、小学校しか知らない教員と小中の交流のある教員では、教員の意識が異なると思うので、授業の違い、習熟の違いが出てくるのかどうか。実際に具体的な成績が上がるなどの効果は、後から出てくると思えます。授業をする上での教員の意識の違いは、大きいと思えます。

個別指導は多分中学校の先生が教えるという場面が作りやすかったりするのですが、中学生が教えるということはあるのでしょうか。

#### 委員

大泉桜学園では、中学生が小学生の教科指導に関わることはありませんが、特別活動の領域で上級生と下級生がいろいろな形で関わる仕組みは設けています。

#### 部会長

学習指導は学習指導要領準拠ですけれども、さまざまな交流活動は小中一貫教育校の独自性が発揮されます。特別活動で活性化できることは、検証、評価していく項目として大事です。それは③番で、検討したいと思えます。

#### 委員

特別活動も学習指導要領に示された理念、実践のガイドラインから逸脱しないように実施しています。例えば、児童、生徒会という組織の合体については、開校準備の2年間で非常に苦慮しました。委員会活動は位置付けが小と中では違いますから随分研究して、教育委員会とも十分にすり合わせをしながら、教育課程の届け出を受理してもらえるようにしました。

#### 委員

検証なので大泉桜学園の取組によって、どのような変化を子供たちにもたらしたかということを検証するという事は、共通理解されていると思えます。子供、教員の状況の変化が、5つの柱の中での基礎データとして必要です。

目を引いたのが、学校生活アンケートです。開校当初から考えると、今の6、7、8、9年生全てにアンケートをとることも考えられます。基礎データとなる指標が必要と思えます。

#### 部会長

基礎データは、全都、練馬区のものもあります。蓄積はまだ3年ぐらいしかありません。来年度も行いますのでこれから蓄積する部分もあります。開校当初4年だった児童が、5、6、7年生となる変化ということも、このアンケート結果がどこまで追えるのか、まだ確認できていませんが、個別でも追えるものもあるかもしれません。

#### 事務局

開校前に児童生徒、保護者等に意識調査したデータはありますが、今後アンケートを実施す

るとすればその対象、方法、有効性については、もう少し検証が必要かと思います。

**部会長**

今用意できるデータとして、例えばこの学校生活アンケートの各年度のデータ保管はどちらでしょうか。

**委員**

この内容は学校のオリジナルですが、どこの学校でも同じようなアンケートをしていると思います。アンケートの保管は学校でしています。

毎年、集計結果を学校だよりやホームページにグラフにして載せて広くお知らせしています。

**部会長**

先ほどの発言は、まず基礎的な変化、データを見て次を考えるということですね。

**委員**

そうです。大泉桜学園に在籍していることで、4年生から5年生にかけての部分や中1ギャップの6年から7年での不安はなかったというデータが出てくると思います。一方、保護者アンケートで、例えば中学校から大泉桜学園に入る小学校の保護者では、不安などもあるというようなデータとして出てくればと思います。

**委員**

5年生ギャップ、8年生ギャップ、あるいは7年生のときに他校から入ってくる時のギャップなど、新たな問題が発生していないかどうか調べられたらと思います。

子供に対してのアンケート、意識調査に「あなたは5年生になるけれども、不安なことはありますか」などの項目がないので、その辺はどう調べたらいいのかと思います。

**委員**

4年生の成長にとっても手応えを感じているのでそういうデータは、ありません。5年生になり校舎がかわっても意欲的な子供たちなので、不安な要素はあったとしても、大勢に影響がないと思っているから、調査項目を増やしたいとは思っていません。

むしろ、大泉学園緑小の児童の多数が大泉学園中に入学する中で、大泉桜学園に行かなければならないのかという意識の解消が大きな課題だと思います。その解消は、大泉桜学園や、大泉学園緑小だけの努力ではなく、システムとして導入している教育委員会のケアについて気になります。

**委員**

分離型の小中一貫教育の検討を考えたときに、例えば3校が同じ中学校の学区域にあり、1つの学校と綿密に組んだときに、他の2校はどういう形で組めるかが課題です。

検証のポイントの1つになると思います。



#### 部会長

今の話は、生活面の変化で直接②番に絡みます。ある特定の小学校と中学校だけが連携、あるいは小中一貫教育をしていくと、それ以外の学校から途中で入ってきた子供の問題は、逆に大きくなりますね。

大泉桜学園でも、小学校6年生から中学校1年になって初めて入学してくる子供たちについては、この②番の生活指導面に絡んで、見ていかなければということですね。

#### 委員

その視点で検証することは賛成です。大泉桜学園は、特に異学年交流を活発にするなど工夫によって、上級生と下級生がお互いを敬愛し、尊敬するような関係性が、ある程度できてきていると思っています。そういう良い人間関係環境があれば後から入ってきても、何らギャップとならないと思います。今まで、如実な中1ギャップになって課題を背負い込んだという認識はありません。

ただし、入るまでの不安は、大泉学園桜小学校を卒業した子供よりも多いという実態があるので、それを解決させることは、喫緊の課題だと思うし、今年度も何かそういう手を打っていかねばいけないと思っています。

#### 部会長

そこで中1から入ってきた子供もうまく適応できているという状況がわかればと思います。

#### 委員

卒業生を見ていると、最初は戸惑いがあるようでも、時間の経過とともに大泉桜学園に馴染んでいるようです。

むしろそういう状況をどのように大泉学園緑小の保護者へアピールしていくかが課題です。入学前のこの時期はとても不安で、大泉学園中への入学を強く訴える保護者もいます。途中から入った子供もうまく適応していることが検証できればと思います。

#### 部会長

そういう形で大泉学園緑小の保護者にアピールできるように形に出せるといいと思います。

#### 委員

大泉桜学園に小学校1年から入学した児童はまだ中学生になっていません。今の7年生以上は、小中一貫教育校に変わることを経験した生徒になるので、今は中1の問題ですが小学校1年生からずっと小中一貫教育を経験した子供が中学生になったときに途中から大泉桜学園に入った子供が不都合な状況にならないように考えなくてはならないと思います。

#### 委員

この部会は、大泉桜学園の検証ですが、公立の小中一貫教育校があつていいのかという考えの方もいらっしゃるので、公立学校における小中一貫教育校が賛成か反対かという問題もでてきます。制度の是非の検証をすべきかどうかはわかりません。

学校行事で小中一貫らしさを出せば出すほど、6年生と9年生が一緒の卒業式や、1年生から9年生まで一緒の運動会でいいのかという意見は必ず出てきます。学校では、そういう地域や保護者の声も想定しながら教育していかなければいけません。そういう声に対する検証も、していただきたいと思います。

#### 部会長

特別活動に関連してでてくると思います。

#### 委員

資料2の①の活用する資料の5番で、「大泉桜学園の教員からのヒアリング」は、全職員からヒアリングをする考えでしょうか。

#### 事務局

ヒアリングは限定的に、どの項目、どの内容についてヒアリングが必要だという計画が立てられたところで、行おうと考えております。全職員対象とは考えていません。

#### 委員

対象が教員とありますが、学校経営、学校づくりには、事務、栄養士も含めて非常に大きなものがありますので、対象として考えていただきたい。また、立ち上げから小中一貫教育をいろいろと工夫してすでに異動した教員も、場合によっては対象にしたほうがいいかなと思います。

小中一貫教育校としての学校運営に疑問をお持ちの地域や保護者の方へのヒアリングも検討したほうが良いと思います。

②番で、生活指導の不登校生徒を減少させるとか云々、問題行動とありますけれども、例えば子ども家庭支援センターの支援が必要なときに、小中一貫教育校でない場合は、まず小学校と中学校の日程的なすり合わせなど苦労すると思います。小中一貫教育校は、子供への対応が迅速と思うので、この辺の検証として、子ども家庭支援センター、民生児童委員にも聞いていただきたいです。

#### 委員

期待される効果の1番に、「学習指導および生活指導の充実を図ることができる」とあるので、これは学習指導に限定したものではなくて、生活指導についても、検証項目を立てるのかと思いましたが、②番が、生活指導が中心になっています。

すると、この効果の文面がそぐわなくなると思いました。

#### 部会長

そこは整理が必要です。基本方針に則しながらも、領域ごとに少し組み直し、①番が主に学習面、②番は広く生活指導面、特に中1ギャップ問題という柱になると思いました。

#### 委員

検証項目をⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期と細分化してそれぞれ検証していく方法と、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期をひとまとめに検証していく方法は、これからの会の持ち方で大きく変わると思います。

検証項目と活用する資料は、具体的に出すことをぜひ考えていただきたいと思います。

それから、②番で、先ほど子ども家庭支援センターの話がありましたが、例えば不登校の子供たち、特別支援教育の配慮を要する子供たちの問題は、小中一貫教育の中で、とても大事だと思いますので、例えばスクールカウンセラーや、校内委員会の持ち方とか、教員間の情報交換といった視点が小中一貫教育の中であってしかるべきかと思いました。

#### 部会長

小学校、中学校が小中一貫教育をしていけば、個別の指導計画は立てやすいと思います。学習面は先ほどの話で、それぞれの期ごとに基礎、基本、意欲がありますので、細分化していくことが大事だと思います。②番は中期の問題がクローズアップされますので、中期に注目した検証があると思いますが、基本的には9年を通しての検証と思います。

特別支援教育のご意見は同感です。

保護者へのヒアリングは、保護者アンケートよりも、個別の保護者の方にヒアリングという形がよろしいですか。

#### 委員

それはどちらでも構いません。学校では学校評価や行事の際のアンケートなどで今まで保護者の方に書いていただいた蓄積もあります。

#### 部会長

既に学校でお持ちのものも含めて、保護者の声をしっかり拾うことはいたしたいと思います。

#### 委員

⑤番は地域社会との連携ですが、放課後の居場所事業を大泉桜学園ではさくらっ子広場と呼んでいます。地域の有志の方々が学校に常駐しての子供への支援として、例えば、宿題の面倒を見てもらいます。それが地域の教育力の活用で大きな要素があると思っていますので、検証で考えていただきたいと思います。

地域型総合スポーツクラブ（SSC）とも、いろいろな連携をしています。

例を2つ挙げましたが、気がついていないような新たな視点があるかもしれないので、この資料の中に入れていただくか、視野に入れてほしいという要望です。

#### 部会長

そうですね。⑤番の3、4、5で必要な項目として挙げていただければと思います。

④番は、全てに絡んでくる項目です。教員間の連携、協力関係なので、組織の問題はここで扱うことになりましょうか。

#### 委員

④番は、「小学校の教員と中学校の教員の相互協力関係を今まで以上に構築でき、学力や体力

の向上等の高い効果を上げることができる」とあります。その後の検証項目を見ると、「学力や体力」は、むしろ①番がいいと思います。

#### 部会長

学力や体力はご指摘の通り①番の中で扱った方がよいと思います。

#### 委員

背景として、知、徳、体の調和は、学校の普遍的な課題、使命です。大泉桜学園が体力への取組がやや弱いという反省は、教職員で一致したところでは、そこで、持久力をつけるために走るという取組を行いました。それには、学校の運営や体制の良さという下地があると思います。そこをどう検証していくかです。

#### 部会長

⑤は基本的には組織の問題が焦点です。学力面は①番で、体力づくりの取り組みは①番に付随すると思いますが、9年一貫での体力づくり、体力指導で、どういうことができるのかという視点は必要です。

その他の部分の説明をお願いします。

#### 事務局

大泉桜学園の検証をする際に、施設との関連で行われている検証項目が大変多いこともあり、施設について触れないわけにいかないと思います。

大泉学園緑小との関係、学区域、学校選択制という練馬区の状況との関連も捉えたいところです。施設と行政に関することは「その他」にまとめています。

施設の部分は、既存の小学校、中学校の施設を改修して使っているという状況があるので、例えば体育館やプールが2つという条件の中で教育活動を工夫した結果、大泉桜学園の特色ある教育活動にも結びついているところがありますので、その点を押さえるような検証をとおしております。

#### 部会長

これは、他自治体の新しい校舎を作って全部1つにする形ではない取組としての大泉桜学園の独自性としておさえておく必要性があります。

学校選択制については、どういうことを考えていらっしゃいますか。

#### 事務局

大泉桜学園に特に7学年で新たに入学する生徒がどのような状況にあるかというところで、経年の様子などを捉えていくことはあるかと思います。ただし、検証として効果の有無はまた別と思いますが、実態の把握としては必要ということで入れました。

#### 部会長

施設面は、大泉桜学園はもともと併設でしたから、施設一体化できました。他は、離れてい

ますから、分離型に持っていくか、完全に小中一貫教育校で新しく建てるという選択肢しかありません。

#### 委員

施設については、大泉桜学園の場合は既存校舎の活用でしたけれども、2校目は、まだまだ不透明な部分がありますが、将来的には、大泉桜学園も建て替えの時期を迎えます。例えば校舎の配置、学年の配置、体育館、プールについてより効果を上げるためにどうするのか。一方で、財政的な面も含めて、将来の課題になってくるので、この段階で、大泉桜学園の既存校舎の活用の中でできている効果を将来につなげていけるものかということを考えていただきたいと思います。

一定の効果があるから、将来の設計ではこの考え方を残そうということもあります。例えば他の学校で、もし隣り合わせぐらいであれば、片方に校舎、片方にグラウンドという形になるかもしれません。そのときに、その校舎をどうしたらいいのかという課題にもつながり、設計にも影響があると思います。

#### 部会長

施設面での検証も必要になるということですが、大泉桜学園の校舎の使い勝手はどうですか。

#### 委員

先進的な施設一体型の小中一貫校を見学すると、体育館が1つしかないから、利用の割り振りが難しいという声を聞くことがあります。大泉桜学園の場合は、体育館もプールも2つずつあるので、かつての小学校の体育館を中学校の部活動で使ったり、朝礼も相互に入れ替えて使うこともあり、ある程度使い勝手は良いと思います。一方で、西校舎と東校舎の2階と3階が繋がっていないというデメリットはあります。

ただし、小学校と中学校では、基準、単元が違います。実験器具が違うので中学校の理科室はそのままでは小学校の5、6年生では使えません。図書室も、5、6年生の西校舎（中学校校舎）の図書室の蔵書は中学生向けで、総合的な学習では使えない場合もあります。

そういう課題はまだ改善し切れていないところがあります。

#### 部会長

先ず現状をしっかり確認することが大事だと思います。

検討項目の柱立て、方針についてのご意見がいただきました。結果だけではなくプロセスという話もありましたので、もう一度、この資料を作り直したものを見ていただく形ですか。

#### 事務局

いただいたご意見を踏まえて資料を見直したいと思います。来年度予定している意識調査、ヒアリングをどこに充てるか、ヒアリングの対象もどこまで可能か、運営上の制約も確認しながら、案を整理したいと思っております。

資料5の学校評価ガイドライン、検証の項目や資料などについて、委員の皆さんからリクエストいただけると、今後の整理にも役立つと思います。

**部会長**

観点の追加や検討に必要な資料などお気付きの点がありましたらお願いします。

**委員**

大泉桜学園では、セーフティ教室は、どのように開催しているのですか。

**委員**

今年度は、1～4年生、5・6年生、7～9年生という区分けで実施しました。

**委員**

安全管理で避難訓練、引取訓練、関連して、集団下校の地区班の区分け状況を伺えますか。

**委員**

避難訓練は、6年生までは防災頭巾を被りますので、大泉桜学園では1～6年生と7～9年生という区分けで行い、引取訓練は1～9年生一括で行っています。

登下校時の特殊性がありますから地区班の班長は6年です。しかし、集団下校訓練は、1年生から9年生まで全員でしています。

**部会長**

区分けは、ケースバイケースということです。

**委員**

PTA組織はどうですか。

**委員**

PTA組織自体は中学部、小学部で分けてそれぞれの部の代表を統括する意味で、いわゆる会長を1人出しています。小学校のほうが、青少年委員会活動など地域のつながりもあり活動が頻繁ですので、中学校と同一組織ではなかなか難しいと思います。

**委員**

項目の中で、キャリア教育（進路指導）は、小中一貫教育の中でウエイトは高いと感じます。先ほど申し上げた特別支援教育を忘れずに入れてほしいと思います。

**委員**

課題としては、大きいですが、個人情報への壁があり扱いが難しいと思います。

**部会長**

特別支援教育のところでは、少し分けて見た方が良いかもしれません。

**事務局**

次回以降の検討の中でも、この資料5に関わる視点もあると思います。本日はここまでという事で、よろしく願いいたします。

5 事務連絡

6 閉会

(閉 会)